



しがだい

==滋賀大学広報誌==
創刊号 平成12年3月



【表紙解説】

表紙左側の2つ並んだ樋は、那覇港を出入りする船が水を汲む場所。周辺に、水桶をのせたサバニと呼ばれる小船が見える。幕末にペリーが来航したときもここで水を汲んだ。樋が2つに増えたのは1807年で、これが屏風の成立時期を示す唯一の手がかりである。裏面下、薩摩藩の+紋の旗を掲げた船は、薩摩の商人を船主とする大和船で、薩摩と琉球の海運に従事した。船上や海岸には、黒い日傘を持った人々が描かれているが、竹と紙が特産の中国福建省の傘であろう。裏面上の建物は住吉神社。航海安全のために勧請されたもの。(9ページ参照)

《目 次》

創刊にあたって

| | | |
|-------------------|-------|---|
| 新たな情報発信をめざす | 加藤 幹太 | 3 |
|-------------------|-------|---|

座談会

| | | |
|--------------|--|---|
| 滋賀大を語る | | 4 |
|--------------|--|---|

教育改革への取組み

| | | |
|--------------------------|-------|---|
| 新教員免許法・セメスター制・教育実習 | 丹羽 雅彦 | 7 |
|--------------------------|-------|---|

| | | |
|------------------------|-------|---|
| ファカルティ・ディベロップメント | 北村 裕明 | 8 |
|------------------------|-------|---|

近江の散歩

| | | |
|-----------------|-------|---|
| 平野神社の蹴鞠史料 | 桑山 浩然 | 9 |
|-----------------|-------|---|

| | | |
|---------------------------|-------|---|
| 琉球貿易図屏風・経済学部附属史料館所蔵 | 岩崎奈緒子 | 9 |
|---------------------------|-------|---|

| | | |
|-----------------------------|-------|----|
| 1万点の地質標本類・教育学部地学研究室所蔵 | 中野 聡志 | 10 |
|-----------------------------|-------|----|

開かれた大学

| | | |
|------------------------|-------|----|
| 経済学部附属史料館 企画展・講演 | 岩崎奈緒子 | 11 |
|------------------------|-------|----|

| | | |
|-----------------------------|------------|----|
| 産業共同研究センター企業経営革新フォーラム | 産業共同研究センター | 12 |
|-----------------------------|------------|----|

| | | |
|--------------|-------------|----|
| 読書のひろば | 寺横 武夫・葛山 善基 | 13 |
|--------------|-------------|----|

| | | |
|--------------|-------------|----|
| 研究のひろば | 谷田 博幸・久保田 肇 | 14 |
|--------------|-------------|----|

| | | |
|------------------------|-------|----|
| 公開講座 21世紀の福祉を考える | 成瀬 龍夫 | 15 |
|------------------------|-------|----|

| | | |
|-------------------------|-------|----|
| 書籍案内 『びわ湖から学ぶ』を刊行 | 堀越 昌子 | 16 |
|-------------------------|-------|----|

| | | |
|--------------------|--|----|
| 滋賀大学発行の学術刊行物 | | 16 |
|--------------------|--|----|

| | | |
|-----------------------------|------|----|
| 特別寄稿 ラオスからの感謝状 私の心の故郷 | 板坂 修 | 17 |
|-----------------------------|------|----|

附属学校から

| | | |
|----------------------------------|--|----|
| ネットデイサミット'99ワークショップin滋賀を開催 | | 17 |
|----------------------------------|--|----|

| | | |
|-----------------|--|----|
| 報道された主な記事 | | 18 |
|-----------------|--|----|

| | | |
|--------------------|-------|----|
| 『しがだい』の編集に思う | 広報委員会 | 18 |
|--------------------|-------|----|



創刊にあたって

新たな情報発信をめざす

滋賀大学長 加藤 幹 太



滋賀大学はこのたび新しい広報誌「しがだい」を発刊し、大学の内外に情報を発信することになりました。ご愛読下さることを願っております。

激変する社会の中にあつて、滋賀大学はあらゆる面での改革を続けています。改革の一つの課題として、広報活動の活性化を検討するために、滋賀大学広報委員会を組織して、従来の広報活動全般にわたつて詳しく再検討いたしました。その結果、分かり易く読んでいただける広報誌として、「しがだい」を発刊することになり、配布先も拡大して、積極的に大学の現状等を理解していただくことになりました。国立大学に対する社会からの批判はきびしいものがありますが、その原因の一つとして大学側の説明責任の不足があつたことを反省し、また情報公開の流れをも意識しまして、今後多くの事例を公開してゆく所存であります。また、学内の教職員・学生に

も大学の改革についての現状を認識してもらつても、学内各部局及び各教官の研究その

他の諸活動を理解する一助となることを期待しています。

滋賀大学は天津（石山）に教育学部、彦根に経済学部と二つのキャンパスがあり、地理的に離れている不利を克服して、全学一体となつて新しい時代に適合できる大学を目ざしております。昨年創立五十周年を迎えましたが、卒業生の総数は学部約二六、〇〇〇名、大学院約五〇〇名に達しています。これらの人たちは滋賀県を中心に近畿圏と中京圏、さらに全国にわたつて教育界・産業界で活躍されています。しかし、私たちは滋賀県に設置されている国立大学として、湖国滋賀への貢献を特に強めていきたいと考えています。生涯学習の推進・産業界との連携など取り組むべき課題は多く、県民各位に滋賀大学を充分に認知していただくためにも、この広報誌の読者を拡げたいと存じます。

西暦二〇〇〇年という記念すべき年に第一号を世に送ることは、まことに喜ばしいことであり、創刊に至るまでご尽力下さつた広報委員会の小笠原委員長を始めとする委員各位に深く感謝する次第です。



滋賀大を語る(一)

〔滋賀大学の環境をめぐる〕

小笠原(司会) まず、滋賀大をめぐる内外の環境から始めましょうか。私の研究は考古学ですが、古代の近江は政治の中心地があった大和、山城に近い地域でした。大津京や奈良時代の紫香楽宮が置かれた時期には近江が政治の中心地だった。農業生産物や資源が豊かなだけでなく、水陸交通にも恵まれた地域でしたが、それは今日でもそうだと思います。

秋山 関連して歴史地理学を専攻しているので、地理と歴史を踏まえて述べますと、大津遷都の理由はいろいろいわれていますが、大和は袋小路のような発展性に欠けるところだった。近江は北陸から直接大陸に通じるルートがあった。天智天皇がもう少し長生きしていたら、大津京から日野の地域に都が遷る可能性もあった。近江は畿内ではなかったが、準畿内でした。近世以降は東の江戸と西の京都、大阪が中心となり、近江はその間の通過地点になっており、拠点になるような地域が育っていません。

岩崎 私は昨年に着任したばかりですが、昨秋に「江戸時代の米原湊」の企画展を行いました。そのとき水運で面白い資料を見つけた。天保期(一九世紀前半)に一四メートルくらいの人力の外輪船が米原湊で開発されたというのです。人気があつたらしく、二〇年ほど運航していました。近江は、そうした新技術や好奇心のようなものが育つようなところ

ころでした。

福田 地域経済の専攻ではありませんが、滋賀県は県民一人あたりの工業出荷額は全国第二位の工業県となっていて、メーカーが多い県です。この県は日本の東西南北の十字路みたいところで、人と文物の行き交いが頻繁に行われています。経済学部も教官の出入りが激しいところでして、新たに優秀な研究者が来られ、成果をあげて出て行かれる方が少なくありません。それで新しい刺激が与えられ、学部全体の研究水準が上がっています。

川嶋 環境問題や環境教育にかかわっているので、琵琶湖のことを少しお話しします。工業化にもなつて、琵琶湖は急速に汚れてきました。四〇〇五〇年前はどこでも水をすくって飲めたそうですが、今はそうはいきません。もつとも直接飲むことは法的に許されていないのですが、それくらい水質は変わってきています。集水域の滋賀県における変化が琵琶湖に反映しています。

丹羽 私の研究は地域とかがわりませんが、滋賀大は通過県に置かれています。研究会などで出かけるには便利です。採用の人事でも応募される方が多く、広い地域からしていたいていますし、学生も広い地域から集まっています。

座談会出席者

加藤 幹太(かとう みきた)
学 長: 生物学

川嶋 宗継(かわしま むねつぐ)
教育学部教授: 環境教育

丹羽 雅彦(にわ まさひこ)
教育学部教授: 代数学

秋山 元秀(あきやま もとひで)
教育学部教授: 歴史地理学

福田 敏浩(ふくだ としひろ)
経済学部教授: 経済政策

岩崎 奈緒子(いわさき なおこ)
経済学部助教授: 日本近世史

小笠原 好彦(おがさわら よしひこ)
広報委員長(教育学部教授): 考古学

たが、今は大津に住んでいます。山が好きなので山岳部におりまして、比良とか鈴鹿の山はかなり歩きました。大阪、京都の辺は田んぼがほとんどなくなりりましたが、野洲、近江八幡の間は広々とした田野があつてよいですね。滋賀大に招かれてから滋賀県が工業生産力が高いこと、教育学部の学生が京阪神型、経済学部では東海、北陸の地域の学生も多いこと、就職も経済学部は東海地域が非常に多いことを知りました。滋賀県は通過県を脱却して、文化、環境、福祉とかの何らかのセンターに将来はなつてほしい。また、「地方大学」という言葉がありますが、滋賀大はこの概念は当てはまらないと思います。大都会に近く、近畿圏と中京圏の接点にありますので。しかし、大学の規模では、まだ地方大学と呼ばれるカテゴリーに入るかも知れない。

川嶋 近年の滋賀県の変化は、しつかりと議論しておかないと危ない。遠目には美しい田んぼがありますが、圃場整備されて環境問題をおこしている面も持っています。

秋山 大津は京都府大津市といわれるように、都市の成長が大阪大都市圏の原理の中でしか動かなくなっています。県の工業出荷額は多いが、本社がどれだけあるかとなると、きわめて少ない。彦根も町を歩いてみますと、中心商店街の店舗の多くがシャッターを降ろしています。人口も草津市に抜かれた。このあたりが大津に教育学部、彦根に経済学部がある滋賀大の環境の問題になります。

〔研究を語る〕

小笠原 研究面ではどうでしょうか。これまでは県内で発掘調査や地域史の研究にもかかわってきましたが、一九八五年以降は各県とも地方自治体の教育委員会が主体になって開発に関連する遺跡の発掘調査を行うようになっていきます。研究の一つとして着任以前から行っている飛鳥京、平城京などの古代都市と大津京、紫香楽宮などを関連させながら研究を進めています。

岩崎 附属史料館に一三万点を超える史料があります。私が整理できるのは一日五〇〜六〇点ですから膨大です。着任してからも二万点ほど新しい史料が搬入されました。戦前の彦根高商時代から近江商人関係の史料の収集が始まり、江頭恒治氏をはじめとする滋賀大のこれまでの研究が地域に理解され、保管体制にも信頼感があるからだと思っています。近江の史料をこれほど広く集めているところは他にありません。

小笠原 その評価は、滋賀県で市町村史の編纂を行うには、附属史料館のお世話にならずに近世編を編むことはできないといわれるところにあると思います。

福田 私は経済制度を国際比較する比較経済

体制論の研究をしています。世界的にも研究者が少ない領域です。地域への貢献は岩崎先生が述べられた史料館が一番していると思います。最近の活動では産業共同研究センターも、民間企業と交流をもちながら盛んに活動しています。それから経済学部は六学科があり、全国最大規模で、総合パートと一緒に何でもありますが、これが目玉というものがないといけません。

川嶋 私は環境教育湖沼実習センターに所属しています。この組織は膳所にキャンパスがあったとき湖沼研究室として発足し、湖沼研究所、さらに湖沼実習施設として省令化され、五年前に環境教育湖沼実習センターに変わりました。自然科学だけでなく、生活科学、社会科学の方も大勢参加して優れた業績をたくさんあげています。従来は研究が中心となっていたが、今は環境教育という視点を加えて指導者育成をメインにあげています。

小笠原 昨春にセンターが中心となって刊行した本を紹介して下さい。

川嶋 昨年四月に『びわ湖から学ぶ』を出しました。五年前に『琵琶湖から考える』を刊行しましたが、もう一度、自然から学ぶことはたくさんあるのではないかとということで、二四名の方に各自の立場から書いていただきました。よく売れており、再版できるかもしれません。これからも自然科学だけでなく、社会科学も環境教育で大事にしていきたいと考えています。

丹羽 それに関連してですが、教育学部では一人一人が専門が異なるということで、広い意味では京大なり阪大なりの研究グループの一員となっており、独自のものを打ち出せていない場合が多い。しかし、理科では滋賀大



手前 岩崎、後方左から福田、加藤、川嶋、丹羽、秋山、小笠原（敬称略）

出身の板坂修さんや杉田陸海さんの研究の流線があり、独自の研究をつながりをもって進めているのはすばらしい。教育学部なので、いろんな分野が必要だが、中核となる人が二人ないし三人いるとかなりのことができるのではないかと。

小笠原 滋賀大がどのような評価をされているのか、学長の立場からはどうでしょうか。

加藤 私の研究は滋賀大を離れていますし、それと研究の評価は簡単には答えられませんので、少し卒業生のことから述べますと、教育学部の卒業生は滋賀県を中心に教師になり、校長までなられる方が随分たくさんおら



左から岩崎、福田、加藤学長

れると思います。経済学部の卒業生は大都会の大企業に就職することになってきていると思います。しかし、近年は地域が重視されてきていますので附属史料館の役割、教育学部の環境教育湖沼実習センターは特色があり、個性的な研究機関として重要な役割を果たしています。これからは大学が大衆化してきましたので、都会型が減って、それぞれの府県の大に進むようになるのではないかと予想しています。国立大学が一府県に一つあるポリシーを遵守して貢献をはかるべきだと考えます。

川嶋 大学の役目としてももちろん基礎研究は大事です。そして、史料館やセンターが地域と連携していくことが、大学の開放にとって重要です。両者の発展が望まれます。

福田 いまのご意見、大賛成です。今後のことを考えますと生涯学習センターのようなセンターがもう一つ、三つ必要ではないでしょうか。経済学部で申しますと、附属史料館のほか経済経営研究所があります。これは学内施設ですが、伝統をもっており、蔵書や資料も収蔵しています。この二つをコアとして滋賀県に貢献できる研究施設がつかれないだろうかと考えています。

秋山 地理学研究室では滋賀県下の市町村を一つずつ選んで

地域調査を行っています。これは宮畑巳年生先生以来のことで、その結果はいろいろと報告されてきており、貴重な記録です。これから地域を対象とした研究が社会科学、自然科学を含めて、教育学部、経済学部で合同でできれば地域に対してもいい刺激になると思います。

【これからの発展】

岩崎 史料館の運営に関連して二つ。一つはたくさん史料をできるだけ多くの人にみてもらうために、展示のあり方を見直すとともに、例えば公開講座のような新たな企画を考えること。もう一つは絵図類がたくさんあり、近江を網羅していますので、絵図のデータベースを作ったら史料を活用できるのではないかと考えて、少し進めています。

丹羽 これまで教育学部のカリキュラムや教育実習に関連してきましたが、学生が現状では非常に忙しく、一、二回生はほとんどつまみついていて、たくさん取りすぎているのではないかと感じています。一方では、専門性をどうのばすかということがあがるが、教育面では少し余裕をもたせたい。

福田 経済学部はグローバル・スペシャリストを育てるのがテーマになっています。高度職業専門人教育を徹底してやっていこうというコンセンサスができています。今年度からセメスター制を導入し、来年度からは本格的にインターンシップ制度を導入し、学生を企業に派遣してトレーニングしてもらい、それを単位として認めるようにしようとしています。もう一つは社会人の方を講師としてお招きするというところで、今年度はアサヒビールのご協力で行った。卒業生の樋口廣太郎名誉

会長に最終講義をしていただき、非常に好評でした。

秋山 これは生きた経済学を学ぶという発想ですね。教育学部の場合は教育実習がありますが、学生たちがそういう動機づけをしているかが問題になっています。川嶋さん、これに対するビジョンをお願いします。

川嶋 最近よく耳にする学生の学力低下という評価には疑問を感じていますが、ただ学生たちが大学は単に通過点で就職さえできればよいとしている傾向が見られます。教育理念について全学をあげて議論し、ポリシーを持ち、それを実現していくことが今必要だと考えています。

加藤 今の改革で一番大きいのは教育改革だと思えますね。組織、運営体制などいろいろ変化しているのですが、全学教育改革委員会でこの一年たくさんしていただいています。まだ教養教育をどうするか一、二年続きますが、これは大事だと思えます。それからメニューが豊富すぎて、学生が消化できないかもしれないということですが、今の大学では七割くらいわかっていないともいわれています。専門教育と教養教育との関係は非常に難しい。教官は専門教育を早くしたがりです。

これは学生の学力を考えることも必要で、どの大学でも同じ悩みをもっています。インターンシップも経済学部はかなりお考えのようです。就職意識をもたせることが大切です。経済学部ではゼミ、教育学部では研究室を中心にマンツーマンで学生の学力、人格まできめ細かく教官にみてほしいと思います。小笠原 今回はこれくらいで終えさせていただきます。ありがとうございます。

への取組み

教育学部 新教員免許法， セメスター制，教育実習

私たちの大学の未来にとって、「教育」が鍵を握っていることは誰もが認めるところでしょう。現在、私たちの大学の教育改革は、二つの意味で転換点に立っていると私は考えます。一つは、学部ごとの専門教育の改革から「大学として」の教育改革への転換、もう一つは、これまで社会や時代の要請からあれもこれも必要と必修単位を積み上げてきた改革から、取得単位を減らし、学生が主体的に取り組み準備や確認のための学習量を要するものに個々の授業を充実させる転換が求められています。

平成十、十一年度にカリキュラム等特別委員会が平成十二年度に向けて取り組んできた教育学部のカリキュラム改革は現在の転換点をも意識したものでした。

平成十二年度カリキュラム改革は、学部の改組による情報教育課程、環境教育課程の発足のため及び教育職員免許法の改訂に伴う学校教育教員養成課程のカリキュラムの見直しが主なる動機でした。

教育学部にとっては、どのような教員を養成すべきか、そのためにどのような教職及び教科等の専門教育を編成するかが最も重要な課題です。私たちは、平成九年度改革のテーマ「教育の現代的課題に応え、実践的指導能力を高める」ことを発展させるとともに、教育職員養成審議会第一次答申(平成九年六月)の求めた「得意分野をもつ個性豊かな教員の養成」をめざし、新教員免許法での「教科または教職に関する科目」の新設など選択履修科目の拡大を利用して、「各大学の創意工夫による特色ある教員養成」を実現できるようにカリキュラムの新しい基本構造を提起しました。専門性を背景とした教科についての高

度の指導能力、学校における教育臨床的な対応能力は最も重要な柱ですが、さらに、社会の現代的、未来的課題を自ら探求し幅広い視野から判断を下すとともに教育課題として追求できる能力の養成も新たに加えました。これは、新学習指導要領の求める新たな教育課題への教員養成学部の確な対応にも連動するものです。このため、学部共通の総合学習科目と複合課題サブコースを創設しました。

平成七、九、十二年度の三次のカリキュラム改革によって、学校の変革に対応し、社会の要請に応え、実践的指導能力を備えた教員の養成のための基盤は整ったと考えています。今後は、個々の授業を学生の問題解決能力を高めるのに直接役立つような充実したものに变革することが求められています。

平成七年度以来、教育実習以外に大学教育の中で学生の実践的指導能力を高める方策が順次充実してきました。特に、平成九年度から創めた科目「教育実践研究」と事前指導の中に子ども達とのふれあいを目的とした「フレンドシップ事業」を導入したことは画期的だったと評価しています。

カリキュラム等特別委員会のもう一つのテーマは、単位基準の見直しとセメスター制の導入により、全学的な教育改革のための基盤作りをすることでした。前者によって、各時限の授業開始時刻を経済学部と合わせることでできました。後者のセメスター制については、今後の教育改革にとって重要な鍵となるものであり、ぜひとも導入する必要があるりましたが、教育実習の実施時期が最大の難関でした。この課題は教育実習検討特別委員会が担当しました。

教育実習の時期は、セメスター制のもとで



授業風景

の授業期間への影響をできる限り軽微にするよう配置するために、附属学校園に、九月に実施されていた運動会や文化祭の時期を見直す等の協力をいただきました。これまで六月、十月の二班で実施していた小学校の三回生実習は見直しが非常に困難でした。種々の課題はあるが、「一班」で実施することによりということになりました。期間中に多人数の実習生を指導するために、学習指導案の素案を実習までに事前に作成しておくよう変更しましたが、これには大学教官の協力も必要となりますが、学習指導案の作成を十分な準備期間をもって行うことは、教材研究の充実および手作りの教具、自分自身で調査した資料等が可能になり、実習へのよりよい効果がえられる期待もあります。学生が教育実践研究やフレンドシップにおける経験を生かし、配当学級グループで協力しながら自主的に取り組むこと、大学教官はそれを支援することが望まれます。

丹羽雅彦(教育学部)

経済学部 ファカルティ・ディベロップメント

大学における教育内容や教育方法の改善が、ファカルティ・ディベロップメントと呼ばれ、注目を浴び始めたのは近年のことである。これまで、大学における教育は、時代状況に対応して理念を議論し、制度上の改革は実施してきたものの、教育内容や教育方法は個々の教官の裁量に任されてきた。しかし、大学における教育をより効果的なものにするためには、大学全体として教育内容や教育方法について検討する必要性が叫ばれ、ファカルティ・ディベロップメントについての取り組みが各大学で開始されたのである。

経済学部では、従来からの懸案であった、講義を通年制から前期後期の半年に変えるセメスター制への移行が、一九九九年四月から実施されることになった。セメスター制への移行を契機に導入される新たなカリキュラム制度を、より効果的なものにするために、一九九八年秋にファカルティ・ディベロップメント委員会が発足し、その活動を開始したのである。

委員会の役割は、第一に、教官の教授方法向上のために、経験を交流し必要な研修を実施することである。第二に、教育システム及び教育方法の現状を評価検討し、改善すべき課題を明らかにすることである。これまで、次のような活動を実施してきた。

教育方法改善のための交流と研修としては、第一に、教官相互の講義参観が行える体制をつくり、第二に、新任教官に対して、経済学部の歴史と教育理念についての研修会を実施し、第三に、教官全体に向けてのいくつかの研修会を開催した。近年、情報教育の必要性が叫ばれているが、それを特定の教官の役割に限定することなく、すべての教官がそ

の内容と課題についての認識を高めることが必要となっている。そこで、九八年度には「情報リテラシー教育における教官の役割」、九九年度には「情報化社会における法と倫理」という研修会を全教官を対象に実施した。

また、文部省メディア教育開発センターからの視察を機会に、全学教育改革委員会と共催してファカルティ・ディベロップメントに関する講演会を開催した。ここでは、全国的な現状と課題についての報告をふまえて、経済学部における活動の現状を報告し討論した。とりわけ、セメスター制への移行に伴っていくつかの新しい講義科目が生まれたが、その一年目の経験が報告された。「経済学の基礎ツール」は、経済学料の一回生全員に提供される科目だが、三つのクラスに学生を振り分け、三人の教官が教える内容と到達点を確認しながら講義している。数学に対する苦手意識を払拭するために、数学の進度別にクラスを編成し、教える内容を事前に協議し、中間時点で進度や出席率をチェックしあい、試験は同一内容にし、試験結果もおおむね三ク



ファカルティ・ディベロップメントに関する講演会で熱心に聞き入る参加者

ラスとも同じ傾向であることが報告された。「経営学を学ぶ」は、主として企業経営学科の一回生を対象に提供される科目で、企業経営学科の全教官が一回づつリレー講義を行っている。こうしたりリレー講義を行うのは、学生の選択の柔軟性と自由度を高める前提として、各教官が担当する講義や自らの専門分野の概略を説明しておくことが必要であるからである。出席率も学生の理解度も良いが、評価基準と講義目的のより一層の明確化が必要との報告がなされた。「情報リテラシー」は、一回生全員に、前期にクラスに分けて実施する情報教育の基礎講義である。キータイピング、コミュニケーション手段の確保、トラブル時の対処法等コア・カリキュラムを準備し成果を上げたが、トラブル対処法を教育するには時間的に余裕のないことが報告された。

教育システムを評価し課題を明確にすることに関しては、「カリキュラム制度及び講義に関するアンケート調査」を実施した。このアンケートは、セメスター移行時のカリキュラム改革に際して、学生の意見や要望が必ずしも十分に反映できなかったという点をふまえ、二年後に予想されるカリキュラム改革の基礎資料とすることを目的としている。

人づくりが、新しい産業の創出においても、地域づくりにおいてもキーワードとなっている。したがって、大学における教育の機能は今後ますます高まるものと思われる。そうした中で、より効果的な教育を行うために、大学全体としてファカルティ・ディベロップメントに取り組む必要が高まってくるであろう。ようやく緒についた経済学部の取り組みを、育ててゆくことが大切なのである。

北村 裕明（経済学部）

琉球貿易図屏風

経済学部附属史料館所蔵

「琉球貿易図屏風」は、中国から帰国した進貢船が那覇に入港しにぎわう様子と、首里城を中心とする城下町を描いたものである。

絵図のほぼ中央に「旨奉帰国」の旗を掲げた進貢船を配し、左側に那覇港を描く。湾内には、琉球が薩摩に派遣した楷船や五月四日の競漕行事に出される爬竜船（俗にハーリーとも呼ぶ）、あるいは、薩摩の紋を付けた大和船が浮かび、岸壁には進貢船を迎えに出た人々が立ち並ぶ。

絵図右側は、上部に首里城をいただし、円覚寺や宗元寺など琉球王府の重要な建物群が点在する城下町が広がる。下部に配された広場は湯原と呼ばれる干潟で、塩づくりの様子や琉球の民俗行事である競馬が描かれている。着飾った女性が路地に立つ遊郭や山原船と呼ばれる琉球沿岸を結んだ小型船も見える。

本屏風と同様の構図を持つ屏風は他に二点確認されているが、ほぼ完全な形をとどめた本絵図は、中国に朝貢する一方で薩摩藩に支配されるという、江戸時代琉球の両属の歴史を象徴するものとして、研究者の注目を集めてきた。また、近年では、

戦災で多くの歴史史料が焼失してしまった琉球史研究にあつて、現在知られていない琉球の風俗を見ることができるといふ点で、本屏風の描写の詳細への関心も高まっている。

このように、本屏風は、単に彩り鮮やかな絵画というよりも、むしろ、近世琉球風俗を伝える貴重な歴史史料のだが、関連史料が全く残されていないという事情から、成立の経緯については、何ら知るところがない。絵図左上部に描かれている水汲み場所が二つであることから、一八〇八年以降の作と推測するのみであったところ、平成十一年度に、関係者のご尽力により、念願の修復が行われることとなった。修復の際には、料紙についての調査が行われ、裏打ちされた文書も明らかとなる。

他の二点の屏風いずれについてもこのような調査は行われておらず、今回の修復が琉球史研究に資するところ



ろは大きい。お色直しした屏風が戻ってくるのももう間もなくである。

岩崎 奈緒子（附属史料館）

近江の散歩

大津平野神社の蹴鞠史料

この原稿を書くこととしていたとき、たまたま新刊の国宝・重要文化財の図録を売り込む電話が入った。最新のデータがなかったでこれ幸いと聞いてみたところ、現在、国宝や重要文化財に指定されている物件は約一二〇〇〇件に上ることである。その中で私に関わりの深い「歴史資料」という区分けに入るものは約九〇件にすぎない。

国宝・重要文化財というと明治三〇年（一八九七）の古社寺保存法以来の慣行で「歴史ノ証徴、美術ノ模範、いわゆる「お宝」がこれにあたる」とされてきた。文化財の中に「考古資料」とか「歴史資料」という区分が付け加わって、歴史を考える上で重要な、例えば外交遺品とか、度量衡、貿易、信仰、印刷、地図、建築、学芸、人物関係資料など、広い分野のさまざまな品が指定されるようになったのはここ四半世紀ほどのことである。

滋賀県は古社寺も多く、国の指定文化財だけで二〇〇〇件を超える有数の文化財県であるけれども、この歴史資料に区分されるものは、園城寺の尺、葛川明王院の参籠札、江戸中期の儒学者雨森芳洲の關係資料などわずかに四件にすぎない。平成九年（一九九七）六月に重要文化財の指定を受けた大津平野神社所蔵の「難波家蹴鞠關係資料」が第四のものである。

平野神社は大津市松本、昔でいえば膳所の町はずれの旧東海道を見下ろす小高い丘の上に鎮座する。『伊勢参宮名所図

1万点の地質標本類

教育学部地学研究室所蔵

岩石標本にも増して、鉱物標本

中野 聰志（教育学部）

私の所には、正確ではないが、滋賀師範学校以来の一万点を超える岩石・鉱物・化石標本がある。

岩石と鉱物は混同されることが多いが、「岩石は鉱物の集合体」であり単位が異なる。化石標本もあるが、少ない。標本類のうちには、購入標本もあるが、実際に野外に出かけて採集してきたものが圧倒的に多い。これらの標本の多くが滋賀県を中心に集められた標本であることは、もはや二度と採集できないものを含めて、地域における価値が高い。岩石標本では、県下の花こう岩、湖東流紋岩類が手厚く収集されている。とりわけ、花こう岩については、卒業研究や共同研究等による成果が既に約一〇編の論文として公表されており利用価値がある。最近では、花こう岩石材の産地推定に問い合わせがあるほど、広く知られつつある。

は充実している。県下各地の各種鉱物が集められている（写真1）が、スカルン鉱物の標本は充実している。また、長石類の標本は、県下の各種岩石中のもはもちろん、世界各地のものが集められ研究に活用されており、多くの成果が公表されつつある。これらの標本は、研究で活用されるほかに、環境教育湖沼実習センターの展示と各種の授業とに活用されている。

標本は、普通手のひらサイズのもののが標準である。個々の標本を、紙の小箱に入れ、それを木箱に並べ、さらにそれを大きい標本棚に収納しておくというのが一般的な収納方法である。しかし、実際は色々な制約のため、「きれいに」「有効に利用されるように」は収納されていない。

上記標本類は、現在、B棟4Fの廊下、3Fの一角、理科講義室、自転車小屋（標本倉庫として整備）（写真2）と分散して収納管理されている。しかし、それでも入りきらない岩石試料が、外に溢れている。『モノ』を大切に各種博物館が充実していく世の中なので、滋賀大学教育学部でも各種標本を展示・研究・授業に真に活用できる標本館ないしは博物館があればと思われる。



標本倉庫（写真2）



田上山産水晶標本（写真1）
（1目盛1cm）



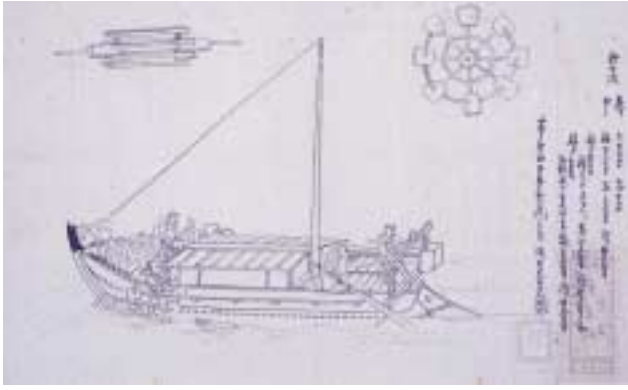
鞆場を備えた平野神社境内
伊勢参宮名所図会（臨川書店刊）より

会』に「松本社蹴鞠神社」と紹介され、その頃から蹴鞠で有名であった。蹴鞠は、江戸時代においては、飛鳥井家・難波家という公家の二家が家元として統制していた。明治以降、飛鳥井家の史料は各所に分かれてしまったが、難波家のものは平野神社に比較的まとまって伝来していたのである。

私が以前の職場（東京大学史料編纂所）の仕事上のごとで平野神社に明治三〇年代に寄進された多量の蹴鞠資料があることを知って調査に訪れたのは一九九〇年のことであった。

その日は台風による暴風雨であった。写真撮影した史料を整理し、報告書に載せたところ、それがたまたま関係者の目に止まり、文化財指定になったようである。歴史資料というと派手なものではないだけに地元でもあまり知られていないが、是非大切にしたいものである。

桑山 浩然（教育学部）



車 早 船

経済学部附属史料館では、一九九九年十月一日から十一月五日まで、「江戸時代の米原湊」と題した企画展を開催した。この企画展では、当館が収蔵する北村源十郎家文書を使って、江戸時代の米原湊を素材に、人や物資の行き交う交通路としての琵琶湖の歴史を紹介した。

展示は、「米原湊の社会」と「米原湊の船」の二つのコーナーで構成した。「米原湊の社会」では、湊の成立、湊の社会構造、近隣の湊との関係を展示した。米原湊は彦根藩の命によって中山道と琵琶湖を結ぶ拠点として開かれた。米原湊には、二人の船年寄の下に、船問屋仲間、丸子船の船持仲間、船船を持つ船持仲間の三つの社会集団があった。一方で、船年寄を通じて、彦根藩船方奉

行の支配下に置かれていた。

彦根藩は、物資輸送の拠点として、米原湊の他に、城下の松原湊、北国街道につながる長浜湊を整備した。このいわゆる彦根三湊は協力し合いながらも、近接しているがゆえに積荷客を取り合う競争相手でもあった。安永期に入って、藩はそれぞれの積場を規定するとともに、各湊の役割を明確化し、三湊間の関係の安定を図った。

「米原湊の船」のコーナーでは、琵琶湖の代表的な船である丸子船と船船、北村家の持船である「真黒船」、舷側に車輪を付けた外輪船「車早船」について展示した。

米原湊の丸子船は、百四十石積以上の大型船で、北は長浜から南は八坂まで、米原と周辺の地域をつないでおり、丸子船は長距離輸送、船船は近距離輸送という住み分けがなされていた。

真黒船は二百七十石積の大型の丸子船である。北村家が米原湊の開設に関わったという由緒により、真黒船には藩からさまざまな特権が与えられていたが、そのために、船持仲間との争いが絶えなかった。真黒という呼称の由来は、真（へさき）を黒く塗ることを特別に許されていたことによる。

車早船は、天候に左右されることなく、安定的に人を輸送することを目的として考案された。天保の飢饉の余波で衰微した湊の起死回生策であった。乗客は二十五人乗り。夕方六時頃に米原を出て

翌朝に大津に着く夜行船で、少なくとも二十年間は運航されていた。人力で動く外輪船が営業目的で運航されていた事例は他に知られておらず、この船の存在は広く関心を集めた。

会期中の十一月九日には、琵琶湖博物館学芸員用田政晴氏を招いて、講演会を行った。用田氏は「信長船づくりの誤算 湖上交通史の再検討」と題し、次のようなことをお話された。

琵琶湖の交通は、東海道線が全線開通すると、それまで大量輸送を担っていた蒸気船が鉄道にとって代わられ、様変わりした。しかし、琵琶湖博物館の丸子船交流デスクに寄せられた情報によれば、実際には、百石積み程度の丸子船や田舟といった小型船が、昭和三十年代まで日常生活の足として活躍していた。

湖上交通の歴史を振り返ると、四つの画期を見いだせる。第一は、畿内王権によって湖上が支配された四〜五世紀、第二は、律令国家が貢納物輸送のために琵琶湖を利用した七世紀、第三は、古代末期以降細分化された湖上支配を、織田信長が、長浜・安土・坂本・大溝の四城の城郭ネットワークを構築し統合した十六世紀後半、第四は、湖上輸送の衰退を促した十九世紀後半の東海道線の全線開通である。

特に、第三の画期は、琵琶湖の船の特質を考える上で重要な時期である。この頃信長は、長さ三十間、漕ぎ手二百人の



米 原 湊

大型軍艦を建造したにもかかわらず、ただ一度使用しただけで小型の早船に作り直した。これは信長が大型船が琵琶湖に適さないこと、特に南湖の水深が浅いという地形上の特色から、琵琶湖に適しているのは、喫水が浅く浮力の大きい船であることを見抜いたためであろう。昭和三十年代まで庶民の足として活躍した丸子船の構造は、この条件を満足させる究極の形態を備えたものであった。

企画展の会期中より車早船についての情報が各地から寄せられ、また、北村家からは真黒船に関わる民俗資料の新たな寄贈を受けるなど、今回の展示は史料館にとっても学ぶことの多い機会となった。

企業経営革新フォーラム第十弾

「実行力（コトを実行する力）の解剖」
「コーディネータ 経済学部奥村哲史助教

（実施時期 五月～六月）

第1回は、ラッセル・レイノルズ・アソシエイツのエグゼクティブディレクター、藪野紀一氏を講師に招いた。『新ジャパニーズビジネスマン』というテーマでヘッド・ハンティング業について詳しくご説明いただいた。業界の最前線での豊富な経験を背景に、新鮮な実例が多数紹介された。

第2回は、株式会社博報堂顧問の石川英夫氏に『日本人の国際性と国際化 求められる交渉力』というテーマでご講演いただいた。同氏は、『四十数年間日本と外国の間を縫うように生きてきた』と自ら語られている通り、世界の各国、各界に入り込んで大きな成果をあげた実績をお持ちである。今われわれに必要なことは、異文化とのコミュニケーションでイニシアティブとリーダーシップを持つことであると主張された。「面倒くさい」と言わず英語での交流に積極的に臨むよう参加者を啓発された。

第3回は、日本電気株式会社新事業推進部から、尾崎正弘氏を講師としてお迎えした。テーマは、『組織力を最大化する為のIT革命』であった。世の中は今後ますます知識の時代へと変化していく。新しいものと古いものが行きかう中で、企業としての明確な方向づけが不可欠であること等、新事業開発を可能とする会社組織の在り方について話された。最新分野の論題であり、参加者の多くに大きな刺激となったように感じられる。

第4回は、コーディネータの奥村哲史

助教が『ネゴシエーションと実行力（アート）としての交渉力を科学（サイエンス）する』というテーマでフォーラムを締め括られた。ネゴシエーションの概念から交渉分析の展開、実践科学としての交渉について、さまざまな例をあげて解説された。アイデアや戦略から確

実な結果を出すための「実行力」についてお話しいただき、フォーラムの目的と意義を改めて確認することが出来た。

企業経営革新フォーラム第十一弾

「中小企業の経営の建て直し・強化はこずする」
「コーディネータ 経済学部戸田俊彦教授

（実施時期 六月～七月）

第1回は、株式会社近江兄弟社代表取締役社長の岩原侑氏より『企業原人への転身 倒産から復活への体験から学んだもの』というテーマでご講演いただいた。倒産した会社を見事に立て直された自信と迫力に満ちた話であった。倒産要因の逆張り経営ということ、地道に売ることから始められ、商売の基本に忠実に従うことの重要性を強調された。教科書を超えた経営の原論を参加者一同拝聴できた。

第2回は、日本ポリスター株式会社の高井宣彦氏を講師としてお迎えした。

テーマは『気付の精神がお宝を生み出す』であった。高井社長は、滋賀大学経済短期大学部を卒業し就職された後、日本ポリスターを自ら設立された。自ら工夫と努力を積み重ねながら、同社を業界の有名会社に育て上げた経緯を詳細に語られた。失敗から教訓を酌みとついで

く過程、ドラマチックな出来事の連続の中で経営者が鍛え上げられていくお話しに、参加者も深い感銘を覚えていた。

第3回は、株式会社比叡ゆば本舗ゆば八代表取締役社長八木幸子氏から『念ずれば夢かなう』というテーマで講演していただいた。同氏は、五年前、前社長が急に亡くなされた後、経営を引き継がれた。そうした事情でありながら、ゆばの消費拡大のためにパワフルな経営手腕を発揮し、見事に事業の継承と発展を達成されている。「念ずれば夢かなう」と信じて行動され、その結果を日々の経営の中に再び生かしていく姿勢は、参加者全てを元気づけるものであった。

企業経営革新フォーラム第十二弾

「金融ビッグバンへの対応を探る」
「コーディネータ 経済学部小栗誠治教授

（実施時期 十月～十一月）

第1回は、滋賀銀行頭取の高田紘一氏より『金融ビッグバン時代における地方銀行の新たな業務展開』というテーマでご講演いただいた。パブルの教訓を踏まえた上で、二十一世紀のパラダイムシフトについて壮大な話を聞くことが出来た。金融ビッグバンにおける銀行経営のあり方、滋賀銀行の経営ビジョンなど、トップ経営者ならではの内容であった。また、学生に向けて、哲学を学び、自分の考え方の基礎となる座標軸を持つこと、業を起す気概を持つこと、グローバルな視点でものが見られるよう先端的知識を持つことを期待として述べられた。

第2回は、名古屋大学大学院国際開発研究科講師の久保田隆氏より『新しい金

融システムの法的課題』について説明された。金融ビッグバンによって法律の立場からどれだけ大きな変革が起きていくかが示された。様々な金融分野を横断的に論じた分かり易い説明であった。また2000年問題についての詳しい対応方法も付け加えられたので、参加者にとってタイムリーな内容になった。

第3回は、日本銀行京都支店支店長の寺尾好正氏が、『金融ビッグバン その必然性と活用の方角性について』というテーマでご講演いただいた。金融ビッグバンのユーザーにとっての潜在的なメリットおよび金融業における情報通信技術の革新の重要性が明らかにされた。インターネット周辺の情報について常に新鮮な関心を持ち、弾力的に活用を行うことにより、従来のビジネスのやり方が大きく変えられることに注目すべきと指摘された。

（産業共同研究センター）



主角ある一書

寺横 武夫（教育学部）

新聞のコラムがある辞書の表現に関する不満の声を取り上げたことがあった。委細は忘れていたのに、それが

「しゅくしゃ」宿舎、「という項目への疑義だったことだけは覚えていた。問題にされていたのは、「一旅先などで泊まる（予定の）旅館」、とある

一般的説明の次に続く一行だった。二公務員などに不当に安い家賃で提供される住宅

もつとも、これは初版（昭和四十七年）の話であって、当時手元にあった第四版（平成元年）では、その同じ項目の説明が微妙に変わっていた。

二公務員などに、名目だけの安い家賃で提供される住宅
「不当に安い」が「名目だけの安い」にトーンダウンしていたのだ。が、それにしても、凄みのある辞書だという印象に変わりはなかった。

ところが、せんだって購入した第五版（平成九年）では、さらに主角が殺されたきらいもなくなかった。二公務員などに、安い家賃で提供される住宅

とはいうものの、この辞書の全体を支える基本的な思想が特異であることに変わりはあるまい。

いつもおるか、この芬芳たる個性を培ってきたのが、辞書の主幹をつとめた山田忠雄という碩学の資質だった。早い話が、この人の手にかかれれば、

「読書」などということばは瞬時のうちに次のようになってしまふ。

「研究調査や受験勉強の時などと違って」一時（トキ）現実の世界を離れ、精神を未知の世界に遊ばせたり、人生観を確固不動のものたらしめたりするために、（時間の束縛を受けられること無く）本を読むこと。

「寝ころがって漫画本を見たり電車の中で週刊誌を読んだりすること」は、勝義の読書には含まれない」

遺憾ながら、山田主幹は、第五版の刊行を目前にして他界せざるをえなかったのだが、その人物の魅力に惹かれて、この辞書の中にひそむ山田忠雄という男の像をひたすらに追い求めた、もう一人の男の一冊にもついでに触れておこう。ご存知の才人、赤瀬川原平の『新解さんの謎』（文芸春秋）がそれである。

ここまでくれば、書名こそあえて伏せてきたものの、筆者の推奨しようとしている一書が、どのような世界を構築しているかについてはほぼ納得も得られたと思うので、最後は「手締め」とゆこう。「物事の決着や成功を祝って関係者一同が掛け声に合わせてする拍子。シャンシャンシャン、シャンシャン、シャンと聞こえるように調子を取る。」こんな辞書があつてよいのだろうか。よいのである。

私の薦める1冊の本

大野耐一著『トヨタ生産方式』

葛山 善基（経済学部）

私の薦める1冊の本として、大野耐一著『トヨタ生産方式』を上げます。

この本は開発者自らがトヨタのかんばん方式を紹介したもので、昭和五十三年に初版が出版されました。この生産方式はアメリカのスーパーマーケットからヒントを得て考え出された物であり、昭和二十八年からトヨタの機械工場内で実地に応用され、三〇年近くかけ作り上げていったものであります。この方式が好きな理由は日本人が謙虚に外国の良いところを認め、ただ単に真似をするだけでなく、新しい方式を開発したことであります。また、この本は開発者自らが紹介しているため、方式の本質がどこにあるかを読みとることが出来ます。

NTTに勤めていた三十六、七才のときにこの本を読みました。なぜこの本を読むようになったかは憶えていません。ただ、読んだ時に子供のころに父が話してくれた言葉を思い出しました。父は水道工事を行う中小企業の経営者でしたが、工事資材の前で、「この工事資材は工事をするためには事前に購入しておかないといけないが、長いこと置いておくとお金の回転に負担になる。」と話してくれました。この話を聞いてから三〇年後にこの本を読んだ時に父が話してくれた問題が当時の自動車会社にもありその解がこの本に書かれているような気がしました。

また、私が好きな言葉に「ネジ一本の技術が国の経済を左右する」というのがあります。この言葉は、中小企業の正確にネジを作る技術が組み立てラインにロボットを導入することを可能にした」ことを意味しています。さらに、最近普及している携帯電話にも中小企業の技術が生かされています。日本の自動車の技術と携帯電話の技術は現在、世界のトップを走っていると思

います。社会のインフラ製品である自動車と携帯電話を支える二つの技術と技術がいつも世界のトップを走ること願っています。

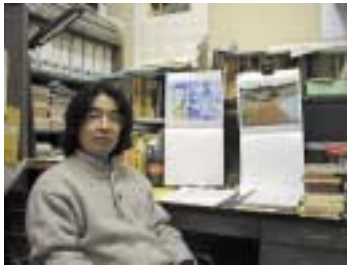


自由貿易からの利益

久保田 肇（経済学部）

私の研究領域は経済学の中でも国家間の貿易取引を分析する国際貿易論という分野で、その中でも特に自由貿易からの利益を中心に研究しています。この自由貿易からの利益は世界全体で自由貿易をする事の意義に関していて、自由貿易に参加する国は自由貿易に参加しない時よりもより良くなれると表現出来ます。そして国際貿易論ではこの他にも、関税などの貿易制限をした時の社会に与える効果、そして国際貿易をする比較優位に基いて輸出や輸入が決まりますが、この比較優位を決定する要因等も分析します。しかし、国際的な貿易取引は多くの商品や多くの国故に多くの消費者や生産者（が関わって）いてすごく複雑です。そこで私は一般均衡論という手法を利用しています。一般均衡論は多くの生産者や消費者が多くの財・サービスをそれらの価格に基いて市場で取引している経済を扱い、これらの市場で上手く売買が成立する（市場均衡と言つ）ような価格の組（均衡価格と言つ）が存在するか、更にこの市場均衡は社会全体から見て望ましくなっているかを分析しますが、その際に各市場を其々独立して分析するのではなく、すべての市場を全体的に分析します。これに対して、個々の市場を独立して分析するのが部分均衡分析です。ところで、この一般均衡論という考え方は十八世紀のフランス人ケネーにその萌芽があり、十九世紀後半のフランス人ワルラスが

定式化し、その後イギリス人のヒックスや第二次世界大戦後はアメリカ人アロー、エブリュー、マッケンジー（筆者が最後の学生）らが発展させて来ました。そして市場均衡の望ましさは、アダムスミスの『国富論』の中で「神の見えざる手」に導かれて個々人が自分だけの利益を追求していても、その結果は実は社会全体から見ても望ましくなると表現されています。そして、自由貿易からの利益というのはこの見ざる手によって表わされた市場均衡の望ましさに対応し、自由貿易が多くの国にとつて望ましいという事を表現しているのです。この事が第二次大戦後の米国を中心とした世界経済でGATTやWTOを形成して自由貿易体制を確立してきている理由なのです。現在筆者は、将来が永遠に続くようなより複雑な世界経済においても自由貿易からの利益が存在する事を一般均衡論の手法に基いて研究しています。この問題に関する筆者の基本的な考え方は彦根論叢、滋賀大学経済学会誌に掲載（第三四号）の論文で説明していますので、興味を持たれた方は是非ともその論文を参照して下さい。



研究室にて

私の研究

英国ヴィクトリア朝の美術

谷田 博幸（教育学部）

私の専門は西洋近代美術史で、とりわけ英国ヴィクトリア朝（1837 - 1901）の美術を研究している。これまで何冊か関連する本を出しているせいもあるが、ラファエル前派の専門家と見る向きもあるようだが、本人はあくまでも今少し間口の広いヴィクトリア朝美術の専門家のつもりなのである。

ところで、私の研究テーマであるが、生来気配の多い自分には珍しく、およそ本格的に美術史なるものを齧り始めた二十余年前から変わらぬ一貫している。要するに、近代絵画は何故主題というものを厭い、棄て去っていったのかということだ。自分の専門領域に則して今少し厳密に言うなら、英国では一八六〇年代あたりから、絵をなんらかの文学的ストーリーや精神的・道徳的メッセージを伝えるための手段としてではなく、絵そのものを目的と捉えるような傾向が芽生えてくる。これを唯美主義と称しているが、こうした芸術思潮が何故この時期発生するに至ったのか、私の年来のテーマなのである。美術史の狭隘な整合性の中だけで答えの出る問題でないことは早くからわかっていたし、そこに様々な価値観の複合的な転換も予想された。その一端を探るつもりで、門外漢であることも省みず、取組み始めたのが、地質学・生物学を初めとする近代科学の発展がヴィクトリア朝人の自然観・宗教観・人間観に突き付けた文化史的・社会精

神史的波紋をあとずける作業だった。身の程知らずと言つべきか、案の定十九世紀の科学の「森」は思いの外深く、分け入れど分け入れど出口は見えず、正に暗中摸索を絵に描いたような有様だった。そこつするうちに、ひょんなことから一年余り前、ヴィクトリア朝における北極探検の文化史に関する一書を書き上げ、いよいよ私の専門外への逸脱は極まったかに見えた。だが、これとて北極探検という一見マジジナルなテーマを扱いながら、結局眼目は盛期ヴィクトリア朝の文明観・自然観・宗教観の闡明にあり、件の「森」の植生に多少の手掛かりを与えてくれる結果となった。同書は加筆・推敲に手間取ったため出版が遅れたが、今年中には上梓される筈である。

だが私の「森」の中の迷走はなお暫くは続きそうである。



ヘンリー・デ・ラ・ベッシュ画
下等動物（人間）の化石について講義する
イクチオザウルス教授 1830年

日本は六十五歳以上人口の割合が七%ほどになり、もはや高齢化社会(aging society)ではなく高齢社会(aged society)であるが、二十一世紀前半にはさらに高齢者が増え、いまの倍ほどの割合になると予測されている。人口の高齢化とともに、さまざまな社会変化が進んでいるが、この変化は今後もっと大きくなる。そうしたなかで、国民の不安と期待が最も強く、社会の対応が問われているのは、日本の福祉システムのあり方であろう。私たちが、本学公開講座で「二十一世紀の福祉を考える」というテーマを取り上げた趣旨もその点にあった。

講座は、五人の講師がそれぞれ専門的な立場から、以下のような題目で講義を行った。各講師の学問的専門分野は、吉川、成瀬、加藤が経済学、大和田が法学、永田が社会学である。

- 第一回 吉川英治「福祉とは何か」
 - 第二回 成瀬龍夫「社会保障制度改革のゆくえ」
 - 第三回 加藤竜太「公的医療保険の現状と課題」
 - 第四回 大和田敢大「男女平等の理念と課題」
 - 第五回 永田えり子「子育てと社会」
 - 最終回 講師の共同討論
- 最初の講義を担当した吉川助教授は、福祉の概念を経済学がどのようにとらえているか、学問的にその認識がどのように発展してきたのかをとりあげ、その

二十一世紀の福祉を考える

(平成十一年度)

なかで社会保障を考える場合のトピックスとして「成長と分配」「効率と公平」「市場と政府」「世代間の公平」などをわかりやすく解説された。

次の成瀬教授は、年金、医療、介護、社会福祉など、現在日本で取り組まれている社会保障制度の改革のあらましを説明するとともに、とくに「国民負担率」や「世代間の負担と給付の公平」「ナショナル・ミニマム」といった改革のキーワードとなっている論点の検討を行った。

加藤助教授は、社会保障のうちのとくに医療分野に焦点を当て、わが国の人口

最後の講義を受け持った永田教授は、わが国の人口構造の変化について、とくに少子化の側面とそれに関連する子育て問題および福祉の課題を取り上げた。

少子化の背景に日本人の職任分離やサラリーマン化の進展があること、子育ての効率化が求められるようになり、それにとともなう問題が生まれていることなどを、児童福祉政策の変転を振り返りながら語られた。

受講生は総勢三十三名で、地域や自治体で福祉関連の仕事に携わっている人がかなりおられ、相当の年輩者も目立った。受講者からは、毎回多くの質問や意見が出された。

高齢化が公的医療保険制度にどのような影響を及ぼしているのか、いま財政問題を背景に制度の見直しがどのように推進されているか、また将来の方向性や課題について話された。

労働法を専門とする大和田教授は、雇用における男女平等問題を取り上げ、労働市場の流動化、多様化を背景に、女性の労働条件が大きく変化するとともに、女性のライフスタイルも変わってきていること、基本的な方向は雇用の男女平等に向かっているが、残されている問題も多いことなどを、現状、制度、国際的な動向を交えながら話された。

どう考えるのかといった質問があった。成瀬教授に対しては、福祉の公的責任のあり方、民間の役割などへの質問が出された。加藤助教授には、医療保険と新たに導入される介護保険の関係、モラルハザードをめぐる評価などに関心が寄せられた。加藤助教授が講義の中で公的医療保険制度や医療経済学に関する文献を詳しく紹介されたのが好評であった。

大和田教授に対しては、男女の役割分担をめぐって異なった意見が出された。また男女雇用機会均等法の効果、女性のパートタイム労働者の待遇問題、日本とアメリカの労働文化の違いなど、多岐に

わたる質問が出された。永田教授との関連では、少子化の原因とされる非婚化、晩婚化についてその対策をどうするのか、また家族と会社をめぐる日本人と外国人の重視度の違いの理由、さらには家族の解体をめぐる将来の見通しなどについての質問があった。

最終回の全講師による共同討論では、経済学部の梅澤直樹教授も飛び入りで参加され、受講生からも自由な意見が活発にのべられて盛り上がった。

講義の時間不足、受講生の具体的な問題関心とのズレなど反省すべき点があるが、講師団としてはおおむね当初の目的を達したと考えている。

成瀬 龍夫(経済学部)



『びわ湖から学ぶ』を刊行 附属環境教育湖沼実習センター



業の推移、スポーツにいたるまで、多角的にびわ湖とその集水域を論じるとともに、びわ湖から学んだことを環境教育へとつなげていこうとするものです。本書は単に研究成果をまとめたものではなく、分かりやすく表現さ

滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センターでは『びわ湖から学ぶ』一人々のくらしと環境』を出版しました（一九九九年四月十日発行）。教育学部には、湖沼や集水域を研究するスタッフがそろっています。今回、同センターに所属する教官四名が、それぞれの専門の立場から執筆し、環境教育への接点を探りました。滋賀の風土、

周囲の工場や居住人口の増加、水田の整備などで、びわ湖へ流れ込む汚染負荷は増え続けてきました。びわ湖で生まれ育ってきた魚貝類が減り続け、外来魚が増加してきています。びわ湖の水温も徐々に上昇してきています。手づかみで魚を取り、水とたわむれて、びわ湖を直接感じとった時代

びわ湖の自然、湖流、水温、生態系、集水域の生活、農業、湖岸の町や産

れており、環境教育のテキストや資料として、有効に活かせるものです。第一章は「びわ湖の自然」、第二章は「びわ湖とくらし」、第三章は「びわ湖と教育」の三章だてで構成されています。加藤学長が刊行の言葉を、各章の扉には、鶴房先生の湖岸の素敵なスケッチが、また各章の終わりにはコラムがあり、そこには本学名誉教授の岡本、北村、板坂先生のびわ湖への想いが綴られています。縄文の昔から、びわ湖の集水域では人々の暮しが展開されてきました。びわ湖は生態学的にもユニークな湖で、魚貝類の固有種が多く生息しています。びわ湖は湖岸に住む人々に生きる糧を提供してくれました。現在は近畿圏の人々の水資源として、飲料水や産業用水を提供してくれています。人々の憩いや遊びの場としても、びわ湖はなくてはならない存在です。私たちは今も昔もびわ湖から有形無形の恩恵を受けてきました。しかしこの五〇年間、びわ湖は大きく変わりました。集水域の暮らしかや産業が変化し、河川改修や道路の整備で、昔ながらのヨシの茂った湖岸は減ってしまいました。



堀越 昌子（教育学部）

から、間接的にしか触れ合えない時代へと移行しつつあります。本書は、このびわ湖を空から、地から、湖の中から、真摯にみつめ、そこから学ぼうとしています。いま教育改革が進む中で、「総合的な学習の時間」の柱としても、環境教育が重視されています。地球的規模で環境汚染が進行していく中で、学校教育においても、環境教育がやれる教師が求められています。この本は足もとのびわ湖からじっくり学んだものを、環境教育の素材として提案し、全国に発信していこうとするものです。

滋賀大学発行の学術刊行物

| 刊行物等名称 | 発行時期 | 発行者等 | 刊行物等名称 | 発行時期 | 発行者等 |
|-----------------------|-------------|--------------------|---------------|-------|--|
| 滋賀大國文 | 7月 | 滋賀大國文会・国語研究室 | 滋賀大学経済学部研究年報 | 12月 | 経済学部・経済経営研究所 |
| 滋賀英文学会論集 | 12月 (隔年) | 滋賀大学英文学会・英語研究室 | 彦根論叢 | 隔月 | 経済学会 |
| 滋賀史学会誌 | 2月 | 滋賀史学会・歴史研究室 | 滋賀大学経済学部研究叢書 | 1月,3月 | 経済学部・経済経営研究所 |
| 音楽研究室研究論文集 (ハーモニー) | 3月 | 音楽研究室 | Working paper | 年3~4回 | Faculty of Economics, Shiga University |
| 社会科教育の創造 | 3月 | 社会科教育研究室 | 研究紀要 | 3月 | 経済学部附属史料館 |
| パイディア | 3月 | 教育学部附属教育実践研究指導センター | 所蔵史料目録 | 3月 | 経済学部附属史料館 |
| 教育学部研究紀要 | 3月 | 教育学部 | 研究紀要 | 4月 | 附属中学校 |
| 教育学研究科修士論文集 | 3月 | 教育学部 | 研究紀要 | 2月 | 附属幼稚園 |

ラオスからの感謝状 私の心の故郷

昨年度に引き続いて本年度もラオスの教育省の招聘を受けて、1999年11月22日から2か月間ラオスの首都ビエンチャンにある教育省・国立教育研究所で理科教育発展のために協力してきた。依頼された業務内容は小・中・高校の理科のカリキュラム開発、教科書作成、教師用指導書作成、実験観察教材開発、授業方法改良であった。

ラオスは1975年の革命で王政を廃して社会主義国家の道を選んだが、旧ソ連の崩壊で経済政策が揺らぎ、1986年から経済解放化政策を導入した。しかしながら、今だに農林業と手工業に依存し、その産業基盤は脆弱である。そこで、ラオス政府は新世紀を迎えるに当たって、世界の科学技術水準に追いつくために、理科教育のカリキュラムや教科書の抜本的な改正の必要に迫られ、この要請となった訳である。

優秀なラオスの教科調査官とカリキュラム開発官7名が日夜協力してくれたので、昨年度は小・中学校の、本年度は高校のカリキュラム等の案を完成させることができた。特に本年度は生徒の個性を活かすために、高校の理科のカリキュラムを理系と文系の2本立てにすることにし、その教育目標と指導内容を成文化した。

また、改良方針を示して案文を作成させている合間をぬっ



受取った感謝状

て、飛行機や車で都市部や山間部の小・中・高校、さらに教員養成大学をも訪ねて授業分析や教科指導を行なった。さらに、請われて教育省で「日本の理科教育の現状と指導要領の改正」「ラオスのカリキュラムの問題点と教員養成の今後へ向けての提言」の講演も行なった。

これらの功績に対して、このような感謝状を教育省・教育研究所から受領した。

ラオス国民一人当たりのGNPもエネルギー消費量も日本人の100分の1で、経済的には決して豊かでないが、心は100倍豊かで、人々は優しい。国中に笑顔が満ちていて、実に幸せそうに暮らしている。前回同様に今回も嫌な思いをしたことは、只の一度もなく故郷に帰ったような安らぎを常に感じていた。「幸せは金では買えない」という大切なことを教えられたようだ。

しかしながら、科学技術振興のための基盤作りをしていて、これが本当にこの人達をより幸せにするだろうか。却って不幸せにしないだろうか、という危惧を常に感じていた。私には「幸せとは何か」は分からないが、せめて、5才になるまでに5人の内1人の子が死に、人口の4分の1しか安全な水が飲めず、平均寿命が53歳という悲しい現実が改善されるだろうと、自分の行為を正当化して業務に励んだ。

板坂 修（滋賀大学名誉教授）



ビエンチャン高校で「生物」の授業参観中の筆者



ラオスの教育省の高官らと教育改革について懇談

附属学校から

ネットデイサミット'99 ワークショップin滋賀を開催

教育学部附属小学校・附属中学校において、平成十一年十二月十八日（土）から十九日（日）にかけて、財団法人コンピュータ教育開発センター（CEC）との共催で開催され、ネットワークショップセンターinかんさい（N e S K）のメンバーを中心としたボランティアの方々、教育学部学生、附属小学校・附属中学校の教員並びに保護者、附属中学校科学班の生徒など、東京や兵庫からの参加も含めて一五〇名余の参加者があった。

十八日（土）の午後には、実施技術講習会が開催され、十九日（日）には、今冬の強い寒波の下、LANケーブルの成端技術講習会をはじめ、附属小学校・附属中学校両校の普通教室などへの配線、情報コンセントの設置のための作業が行われ、参加者はネットワークの基礎知識とともに、配線や情報コンセントの設置などの実技もともに学んだ。

附属小学校・附属中学校とともに、校内にある全てのコンピュータからインターネットへの接続ができ、教科の学習や総合学習など、それぞれの児童・生徒の学習の状況に応じて活用できるネットワーク環境にある。さらに、今回、校内の全ての教室に情報コンセントが設置されたことは、校内のデータの共有化を図ることが可能となるなどコンピュータの活用の幅が広がり、教科や総合学習、情報教育を進めていく上で、両校にとって画期的なことである。

報道された主な記事（12月・1月）

十二月

- * 全国小・中学校作文コンクール中央審査入選 上田季子さん(附属中学校)〔読売(十二・一)〕
- * 県内初「ネットデイ」 附属小・中学校(京都(十二・四)他)
- * 「びっくりアートフェスティバル」 附属小学校で開かれる〔朝日(十二・六)〕
- * 「現代の経営」講義行われる〔朝日(十二・一〇)〕
- * 地球環境教育論 川嶋宗継教授(毎日(十二・一一))
- * 台湾大地震救援募金 附属中一年C組〔読売(十二・一六)〕
- * 中学の音楽体験学習に出張演奏 滋賀大オーケストラ(毎日(十二・一八))
- * 「ネットデイ」開かれる―附属小・中学校(中日(十二・二)他)
- * 教育学部課程の改組 環境教育課程を新設(中日(十二・二五)他)
- 一月
- * 平成二二年度学生募集要項発表(近江同盟(一・一))
- * 教育学部長選任 石上三雄教授(毎日(一・七)他)
- * 環境教育課程新設(朝日(一・一三))
- * センター試験始まる(朝日(一・一六)他)
- * 教育問題の新拠点に 教育実践総合センター新設(京都(一・一八))

- * 国際交流会館が完成(京都(一・一九)他)
- * 経済学部長選任 成瀬龍夫教授(朝日(一・二九)他)
- * 四月から環境教育課程を新設(中日(一・三一))



中日新聞(2000年1月31日)



附属中学生も参加しての成端技術講習会

『しがだい』の編集に思う

大学は文化、科学の発展と教育にかかわる研究・教育者が集団をなすところです。ここには多様な分野にわたって日常的に研究と教育が営まれています。しかし、この大学で、どのようなことが、どのように進められているかを知ることはそう容易なことではありません。しかも、これまで国立大学の研究、教育に関する情報の公開はいずれの大学でも十分なされてきたとはいい難い面が少なくなかったといわれています。

滋賀大学では、これまで『滋賀大学月報』『滋賀大だより』などの広報誌を刊行して本学で行っている研究、教育にかかわる情報の提供を行ってきました。しかし、昨春に広報委員会が発足し、本学でのこれまでの広報活動のありかたを再検討した結果、試みの一つとして2000年を迎え、新たな装いをもつ広報誌『しがだい』を刊行することで意見がまとまりました。

滋賀大学が所在する滋賀県は、古代では近江国と呼ばれ、奈良時代の中頃に作られた藤原氏の『家伝』に記された「武智麻呂伝」(藤原不比等の子)に、「近江国は宇宙有名の地なり。地広く人衆く、国富み家給ふ。東は不破に交り、北は鶴賀に接す。南は山背に通じて、この京邑に至る。水海清くして広く……」と記されており、じつに自然に、また交通に恵まれたところでした。滋賀大学が彦根市、大津市に置かれている自然的、人文的な環境もさほど当時と変わっていません。近畿圏にあって東海地域、北陸地域にも通じたじつに恵まれた環境で我々の研究、教育は進められているのです。しかし、古代と同じとのみいえません。異なる点の認識も重要です。

新たな広報誌は年に5号を刊行し、そのうち2号は学生委員会が主体に編集することになりました。この誌面には現在の滋賀大学をめぐる多様な環境のなかで行われている研究、教育と学生に関連する記事が満載されることになるでしょう。これまでの『滋賀大学月報』『滋賀大学だより』でも多くの情報を提供してきましたが、新たに分野を広げ、内容豊かな記事を載せるつもりです。ここには本学の過去の遺産と現在を基にしながら、未来につながるものが誌面に展開するはず。よき読者であるとともに、よき筆者であることをお願いします。

広報委員会 小笠原 好彦



発行日：平成12年3月1日
発行：滋賀大学広報委員会

〒522-8522

彦根市馬場一丁目1-1

(TEL: 0749-27-1172)

E-mail: koho@biwako.shiga-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.shiga-u.ac.jp>

